

今月の 我がマチの 一番星☆



指導する井上さん(右から2人目)



井上一雄さん

子どもの心と体を育てる

「二人が指導できるのは5人から6人ではないでしょうか」と話す井上一雄さん(早来大町)は安平町スポーツ少年団の本部長として青少年の健全育成を担っています。

20代のとき空手の指導者を目指し上京。昭和46年に兵法守行所清心館菊地道場で三段位を取得し、早来地区で空手をとおして子どもたちに心身の鍛錬を行ってきました。

「子どもを育てるということとは自分自身を育てることになる」と振り返り、「自分自身が模範を示さなければ子どもたちには付いて来ませんね」と日々の言動にも気を使っているそうです。

また「ほめながら、悪いところを改善するようアドバイスする」ことに心がけてきたと言い、「将来、伸びるように

子どもたちの性格を見極めることも大切です。そのためには日ごろから、よく観察していることが第一」と強調していました。

「空手は体力の養成と基本動作の積み重ねです。それは、どのスポーツにも共通していることかもしれませんね」と

指導者の心構えを語り、特に武道の場合は恐怖心を克服しながら前に出ることを教えてきました。

厳しい練習をおおして、苦しいときにも負けない心を育て、人生においても前向きに生きることを目指しているそうです。

日本では沖縄で生まれ、今や格闘技として世界中に普及した空手ですが、相手を攻撃するだけでなく、自らの技を磨くことで体と心を鍛えるスポーツとしての魅力があるからだと痛感するようになったと話してくれました。

使う人に喜んでもらえる杖作り



田中 徹さん

「杖作りのきっかけは姉へのプレゼントです」と話す田中徹さん(安平)は熊本出身の九州男児。竹林が身近にあり、杖の材料はたくさんありました。東京で青果物バイヤーとして働いていた会社を定年退職後、安平町に来て高山植物の多さに感動しましたが、「地元の人は雑草程度にしか

思っていないのが残念。都会では一輪の花を求めて何時間も出歩くことが当たり前なのに」と首を傾げたそうです。

趣味とボランティアで始めた杖の製作は8年を経過。「熊本で伐採して乾燥や調整時間を含めると1本作るのに1か月を要します」と語り、使いやすさと安全性を考えた結果、T字型にすることで握力の衰えた高齢者からも喜ばれています。毎年150本近くを作り文化祭に展示し、希望者には無料で提供してきました。

知人から「材料代くらいはもらってはどうか」との提言に、「1円でも受け取ればボランティアではない」と断っています。「利用者に喜んでもらうのが一番嬉しい。細かい作業の連続による疲れも取れる」と満面の笑みを浮かべていました。使う人が男性か女性か、どんな体格なのか想像しながら世界に1本だけの杖を作り続けます。

「真っ直ぐな竹はない。手間をかけて伸ばして理想の形にしていくのです」と話す田中さんは、それぞれの人の体に合った機能性と味わいある杖を必要とする方へ提供していきたいと目を輝かせていました。



杖の材料を保管している倉庫